

JASIS

NEWS

No. 30

2004/2/1

日本インテリア学会会報

■第14回日本インテリア学会大会

■概要報告—大会を振り返って

第15回大会実行委員長
日原もとこ（東北芸術工科大学）

かれこれ7～8年も前に、小原前会長からは是非一度、東北芸術工科大学で大会を開いて欲しいと打診されていた。でもその頃は東北支部も存在せず、ましてや東北の学会会員は各地に散在していて、日大郡山の若井研究室周りがややまとまっている程度であった。本学の教員は日本デザイン学会には相当数が加入しているが、本学会へはなかなか、会員を勧誘できず肩身の狭い思いがあった。

そこへ、4年前に若井氏と私の2人が呼ばれて、再び学会の活性化の為に東北支部を作るよう促されたのだ。一口に東北と云っても、隣県の秋田などへは東京へ行くよりも余程時間がかかる。ましてや、岩手や青森から会員を募るなど、現実離れしていて想像だに出来ない。懐疑的な私に対して若井氏は、まことに泰然自若として二つ返事で引き受けられたから堪らない。その煽りを受けた私は、いつしか何でもできる気になり、若井氏が率いるインテリアプランナー協会東北支部の力を借りて何とか支部の誕生へと漕ぎ着けた。しかし、その誕生直後にはプランナー協会事務局を兼務された、唐木氏の急死と云う悲劇が待っていた。引き継ぐべき資料もうやむやになり、急遽、本学の鈴木敏彦氏に窮状を訴え、強引に事務局長を引き受けてもらうという、劇的な展開があった。

東北支部設立が大会開催のためのステップだという理解は、頭から離れることはなかったのであるが、いつ実行に移すかが問題だった。というのも、本学は改革をすすめる中で2年間も続けて、キャンパス全体が工事中

だったからである。それに、我が大学は、授業以外でも一年中、公開講座やイベント、展覧会等で教室と云わず、ギャラリー、エントランス、能舞台に至るまで、1年前からフル回転である。加えて、秋の土日という期間は殆ど大学祭やオープンキャンパス、A0入試、推薦入試、県市の行事等で塞がるのである。しかし、やはりチャンスというものはやってくるものだ。永年のデータから、最も他行事が重ならない日を選び出した。そして、一年前に一切の行事が入ってこないように手を打った。半ば賭けである。それが、2003年11月8.9という日だった。

初日は見学会というのに生憎雨天で、特に山寺では登拝を夢見て参加された方々も多かったようにお見受けする。にもかかわらず悪天から、旅行会社の判断で中止してしまつたらしい。楽しみが半減した皆様には大変お気の毒なことをしてしまった。一方、歴史部会の見学グループは、事前調査も行き届き、明治から大正に建てられた疑似西洋建築群をピックアップして見て廻られたそう。こちらは当方の企画とは無関係ながらも、愛知産業大学の内藤晶学長から「山形はなかなか、文化度の高いところだね」とお誉めに預かり、ほっとする。しかし、初日の午後から見学会と並行して開かれた理事会は議題が山積していて、理事の半数の方は山形が初めてなのに、何人かは見学会をキャンセルして臨まれた訳だから、これもお気の毒なことだった。そのため、見学会は26名に減ってしまったという。

その後、これも前会長のご所望は、講師に本学の理事長というご指名で異色の記念講演会が開かれた。参加者は90名。会津大学の牧田和久氏の司会で始まった講演テーマは「東北ルネッサンスとは？」で、内容は東北の地にどのような哲学をもって、本学が設立されたかと云

う経緯と、同氏によって先行設立された姉妹校：京都造形芸術大学との関わりが解説された。京都の基盤は「弥生文化」。対する東北は「縄文文化」と位置付ける。その縄文文化こそが原日本人の基層文化であって、この二つの異なる側面が手を結んでこそ、完結するという信念がある。「いまや、芸術文化こそが人類を救う唯一の残された手段だ」と熱く語った。何ごとにも型破りの御仁なので、参会者にはどのように映ったかは分らない。

続く懇親会では、講演会に隣接した宴会場に90名がそのまま移動して行われ、若井氏の巧みな司会進行で和やかで賑やかな宴となった。参会者の皆様には、大学運営という立場での、「東北ルネサンス」の話は案外新鮮だったようで、会う人ごとにその話題が持ちかけられる。会場を盛り上げたアトラクション、学生和太鼓チームの演奏とあいまって「縄文文化」を彷彿とさせたのか、「凄いパワー」というお世辞を頂く。会場ではあちらこちらで大小の輪ができて話も弾み、雰囲気も楽しそうな笑い声が上がっていた。また、最後まで気が揉めた温泉宿泊組も約50名、市内のホテル組が約20名という案配で、その他は各自で手配されたのか、翌日の本大会では約132名の参加者をみて、1フロビーはときならぬ賑わいを見せた。

第2日目、研究発表大会は高橋会長の開会挨拶に始まり、9:45分から3つの会場で繰り広げられた。大会開催にあたって、小原元会長が出された条件は、少しでも多くの研究発表に触れる機会を増やすことと移動の時間を短くすることで、会場は2会場が望ましいとされた。それを受けて調べると、例年は大体50件数以内に落着いている。当初、一人12分の持ち時間であれば、午前中に10件×2会場、午後から15件×2会場でいけるとふんだ。ところが、蓋をあけてみると、口頭発表が60件（実際はキャンセルもあって、54件だった）という申込みである。16:45までに終了させるにはMaxで50名だから、これは到底、2会場では間に合わない。急遽、3会場を当てることにした。しかし、増えたといっても大した数ではないので、午前中で賄える。そこで、午後からは予定通り2会場体制にもっていけるし、詰め込んでいた午後からの発表件数を若干減らして、午前にまわすと、かなりの時間的余裕ができる。パネル発表（9件）の時間も他に重なることなく、40分の時間が取れて上手く事が運んだ。かくして、閉会式は16:45分から会長の閉会の辞で、無事締めくくられた。

今回の大会こそは四方八方から関係者の皆様に支えられ、期待以上にサマになったというのが本音である。とりわけ、本大会は本学の助手：小野里奈さんの千手観音のごとき働きに負っていたことを申し添えねばならない。はるばるお越し頂いた学会員各位、御協力頂いた役員、幹事各位、学生諸君、最後の最後までプレッシャーを掛けてしまった東急観光の渡辺氏、本当に有難うございました。

■見学会報告—文翔館及び山寺風雅の国

案内人：広谷 幸江

11月8日（土）、暦の上では立冬という日でした。朝から冷たい雨が降り続き、山寺に登れるかしらと心配しながら天候の回復を願っていました。

初めに、大正5年6月に建設された（重要文化財「山形県旧県庁舎及び県会議事堂」愛称：文翔館）を見学しました。イギリス・ルネサンス様式を基調としたレンガ造りの建物です。（設計は米沢出身の中條精一郎氏顧問、田原新之助氏担当。）昭和59年に国の重要文化財に指定された後、約10年の歳月をかけ修理工事が行なわれました。解体は最小限に留め、極力在来の材料を使用しながら従来の工法で施行しています。山形市の目抜き通りのシンボルとも言えるこの建物は、創建当時の姿で蘇り大正の古き良き時代の薫りを今に伝えています。

次の見学先山寺は土砂降りの中、奥の院まで1015段もあるという、かなり狭く急な階段を登って行かねばなりません。不測の事故を避けたいという旅行会社の決断で、急遽、対岸にある「山寺風雅の国」から山寺の全景を見て頂く運びになりました。約三万坪の敷地に芭蕉直筆の作品や奥の細道に関する資料を展示した「芭蕉記念館」・市民大茶会が催される茶室、更に木造組立柱とトラス小屋組架構による大空間を持つ和風レストランを中心に、朝日村田麦俣から移築・再生した築260年の多層民家は「草木染館」として、レストラン大広間「千本桂」は村山市の旧阿曾家より、移築・再生され、更に今野忠一画伯の生家を作家瀬戸内寂聴氏の庵「月日庵」として配置しています。また、此处、風雅の国設計思想は山寺の眺望とともに、逆に山寺から見下ろした時の、この風雅の国の建造物の屋根の重り合の美、まさに「見る、見られる関係」という、相互の景観を意識した見事なプランニングがなされています。それは一貫した集合体の美で、特に矩勾配の屋根の重なりとそこに展開する空間の繋がりによって、表情豊かなくつろいだ雰囲気となっていました。これらの監修及び設計は東北芸術工科大学の設計に深く関わった、本間利雄氏によるものです。

山寺登拝を楽しみにされていた方々は大変残念な様子でしたが、雨に煙る紅葉の山寺はどのように映ったのでしょうか。桜の季節も又格別です。

是非もう一度お越し下さるようお願いしつつ。

■会計報告

1) 収入の部

＜科 目＞	＜金 額＞	＜備 考＞
大会費用	¥450,000	インテリア学会本部より
学会員より	¥699,500	大会参加費・見学会・懇親会・昼食費
補助金	¥300,000	東北芸術工科大学
寄付	¥30,000	東北芸術工科大学（徳山詳直理事長）
補填	¥139,878	東北芸術工科大学
収入計	¥1,619,378	

2) 支出の部

＜科 目＞	＜金 額＞	＜備 考＞
印刷費	¥306,134	大会案内・プログラム（発送費含む）
備品費	¥86,003	消耗品・備品
見学会費	¥116,760	
懇親会費	¥252,000	
昼食費	¥125,330	
交通費	¥36,750	送迎バス等
アルバイト代	¥188,705	学生アルバイト（設営撤収・当日受付）
返金	¥10,000	不参加の方へ返金済み
大会参加費	¥233,000	本部事務局へ
発表登録費	¥30,000	本部事務局へ
記念講演謝礼	¥30,000	
通信費	¥3,660	
会場関係費	¥194,390	会場借用代及び表示物制作代
その他	¥6,646	会場茶菓子代
支出計	¥1,619,378	

3) 収支

収入¥1,619,378 － 支出¥1,619,378 ＝ 0

■大会役員

大会委員長	小沢 明（東北芸術工科大学 学長）
実行委員長	日原 もとこ
副委員長	若井 正一 鈴木 敏彦
常任委員	渥美 浩章（運営委員長・東北芸術工科大学 デザイン工学部長） 降旗 英史 山中 良子 牧田 和久 渡辺 雅志 市岡 綾子 小野 里奈（大会事務局担当）
委員	早野 由美恵 水野谷 悌子 本郷 和枝 広谷 幸江 草刈 みのり

■大会研究発表題目

A. 口頭発表部門

□計画 (1) 座長 北浦かほる（大阪市立大）

- 001 住宅における団らん空間と方位に関する研究；伊藤章人（名古屋工業大学）、松本直司
002 住宅における食事空間と食卓の演出に関する調査研究；正岡さち（島根大学）
003 平面計画の質的評価に関する研究（1）；横田哲、石橋実（パナホーム㈱）
004 ペット共生賃貸住宅；山内美奈子、石橋実（パナホーム㈱）

□計画 (2) 座長 島崎信（島崎信事務所）

- 005 インテリアのパターンコーディネートに関する考察（4）；小宮容一（芦屋大学）、井上徹
006 ；韓国のマルと日本の板敷に関する研究；崔永逸（大阪産業大学）、植松睦子
007 住宅に関わるDIY志向性調査 その1；中村孝之（積水ハウス㈱）、河崎由美子
008 インテリアデザインと建築設備；小原誠（文化女子大学）

□計画 (3) 座長 小原誠（文化女子大学）

- 009 高齢者施設内居室の照明環境から入居者の心理行動および介護者の作業成果に及ぼす影響；李景林（千葉大学）、清水忠男、佐藤公信
010 カフェにおける客席空間の好ましいあり方；岡野健作（千葉大学）、清水忠男、佐藤公信
011 家族のまとまり感の違いによる集まる場に対する意識；白石光昭（小山工業高等専門学校）
012 レースカーテンが在室感評価に及ぼす影響；國嶋道子（京都女子大学）

□計画 (4) 座長 小宮容一（芦屋大学）

- 013 空間の自己化とその表出に関する研究 その3；松田奈緒子（京都工芸繊維大学）、加藤力
014 空間の自己化とその表出に関する研究 その4；加藤力（宝塚造形芸術大学）、松田奈緒子
015 就寝まわりの生活実態に関する検討；秋吉崇博（日本大学）、若井正一、浜田育実

□歴史 (1) 座長 牧田和久（会津大学）

- 016 昭和10年代の暮らしとものからみた生活領域研究；長山洋子（文化女子大学）、林知子、前島諒子
017 ＜礼法書系道具雛形＞における座屋建築およびインテリアの室礼に関する一考察；永田恵子（名古屋工業大学）
018 大正・昭和初期における和洋併立住宅について；高橋洋子（名古屋聖霊短期大学）
019 しな織り布考察；山中良子（東北芸術工科大学）、斉藤大、渡辺恭子

□歴史 (2) 座長 長山洋子（文化女子大学）

- 020 大阪城本丸御殿白書院連歌之間障壁画《武隈松

図》に関する一考察；平井直良（相模女子大学）
021 C.R. マッキントッシュの初期家具デザインの特徵 その2；高橋敏郎（愛知淑徳大学）
022 米国アーツアンドクラフツのモリスチェア；金井雅之（埼玉県立新座総合技術高等学校）
023 一般アンケートにみる『近代名作椅子』の嗜好性；島崎信（武蔵野美術大学）、中野公力

□人間工学 (1) 座長 上野義雪（千葉工業大）

024 限定空間内の行動特性に関する人間工学的検討；清利幸（日本大学）、増子順一、若井正一
025 量販店におけるPOSカウンター業務に関する人間工学的研究；嶋崎雄一（日本大学）、若井正一
026 直階段につながる回り階段の割り方が昇降動作の連続性に及ぼす影響；岸本文一（東京理科大学）、矢島規雄、直井英雄
027 男性小便器床の汚れ対策効果；建部謙治（愛知工業大学）、浅野剛吉

□人間工学 (2) 座長 若井正一（日本大）

028 ベッド用マットレスの人間工学的評価 その1；佐藤昌弘（フランスベッド㈱）、大図千恵美、上野義雪
029 ベッド用マットレスの人間工学的評価 その2；大図千恵美（千葉工業大学）、佐藤昌弘、上野義雪
030 千葉工業大学におけるバリアフリー環境の実態と改善に関する研究 その9；塚越理恵（千葉工業大学）上野義雪
031 キッチン用加熱機器の操作性に関する人間工学的評価；赤塚史章（千葉工業大学）、上野義雪

□教育環境 (1) 座長 山中良子（東北芸術工科大）

032 制作モデルの表象にみる子供のインテリア観について；片山勢津子（京都女子大学）
033 インテリア教育を通じてみた小中学生のインテリア観 その2；鈴木儀雄（スズキデザインオフィス）、加藤力、片山勢津子
034 保育空間の施設設計にみる子ども用デザインの文化比較；北浦かほる（大阪市立大学）
035 紙芝居形式による教育環境；藤原智代（東北芸術工科大学）、日原もとこ

□教育環境 (2) 座長 片山勢津子（京都女子大）

036 高層化された単位制高等学校の学習環境についての一考察；武田康（日本大学）、若井正一
037 大学研究室における作業空間およびエレメントの研究；迫坪知広（九州芸術工科大学）、平井康之
038 幼稚園における幼児用椅子についての研究；播磨晶子（九州芸術工科大学）、平井康之

□プロダクト 座長 井村五郎（千葉工業大）

039 東北の素材とかたちの研究；鈴木敏彦（東北芸術工科大学）
040 学生モニター・デザイナーによる生活アイディ

ア家電の製品開発研究について；大野由起子（九州芸術工科大学）、坂井陽爾、湯本長伯

041 CAD/CAMによる車椅子のデザイン研究 その1；山口光（東北芸術工科大）、藤原俊三、上山輝、八重樫康治
042 下肢障害者のためのワークプレイス研究；伊藤将（九州芸術工科大学）、平井康之

□音環境 座長 直井英雄（東京理科大）

043 音の位相；酒井聡（東北芸術工科大学）、鈴木敏彦
044 「音を展示する」試みと評価；宮下芳明（北陸先端科学技術大学院大学）
045 既存木造住宅の外壁開口部の遮音性能に関する研究；清水実（日本工業大学）、日當修一
046 木構造による遮音；棒田邦夫（金沢学院大学）、村上章彦

□評価 座長 渥美浩章（東北芸術工科大）

047 インテリアの職能資格水準とその具体的評価に関する研究；湯本長伯（九州芸術工科大学）
048 視覚環境移行事前評価の方法論的研究と具体の環境評価について；湯本長伯（九州芸術工科大学）、葉祥栄、松本文夫、西出和彦
049 建築・インテリアの優れた作品・環境の評価およびその普及研究；湯本長伯（九州芸術工科大学）、加藤茂

□環境 (1) 座長 渥美浩章（東北芸術工科大）

050 半透明膜屋根等の設置による建物北側の光環境改善に関する研究；湯本長伯（九州芸術工科大学）、石田壽一、大井尚行

□環境 (2) 座長 湯本長伯（九州芸術工科大）

051 半導体式ガスセンサーによる学校教室空気室の連続モニタリングについて；中山正樹（新コスモス電機㈱）、杉下順一郎、村松學

□色彩 座長 湯本長伯（九州芸術工科大）

052 産科病棟における患者サービスと情報提供に関する一考察；小野清美（岡山大学）、奥田博之
053 従来とは異なる色彩環境の体験がおよぼすもの；塚口真佐子（塚口建築研究室）
054 屋内における印刷木目の経年色彩変化；杉江良寛（京都大学）増田稔

B. パネル発表部門

□デザイン・設計 座長 鈴木敏彦（東北芸術工科大）

055 Easy Foot Stool；井村五郎（千葉工業大学）、鈴木敦詞、松崎元
056 折り畳み収納家具と仮設空間構成への適用；尾形直紀（東北芸術工科大学）、渥美浩章
057 支持面分割ユニットによるシステムチェアの設計；松崎元（千葉工業大学）

058 自然光を活用する空間演出の方法；武田隆史（東北芸術工科大学）、渥美浩章

059 ツアーショップのためのテンポラリースペース；伊藤伸（東北芸術工科大学）、鈴木敏彦

060 草平庵プロジェクト；今井裕夫（岐阜市立女子短期大学）、船曳悦子

061 自然素材を使ったシニア夫婦の為の生活空間；伊藤道子（MID）

062 高島町庁舎通り街路オブジェ計画 その1；渡辺雅志（東北芸術工科大学）、小野里奈、降旗英史

063 高島町庁舎通り街路オブジェ計画 その2；小野里奈（東北芸術工科大学）、渡辺雅志、降旗英史

■研究発表講評（第1報）

A. 口頭発表部門

口計画 (1)

001は新建築住宅特集に掲載された過去5年間の住宅から167件を取り上げ、南面以外の方位をもつ182の団欒空間の、方位の決定要因について考察している（伊藤他1）。その結果、団欒空間の方位向は接道方位、中庭、隣家開放方向、傾斜、周辺環境に単純に支配されているものと、それらの要因が複合しているものと結論づけている。本編で取り上げた団欒空間は南向以外の方位をとらざるを得なかったのか、あえて南向きを避けているものなのかということや、新建築住宅特集に掲載されている住宅の特殊性、全国規模での立地条件の差異を同一レベルで比較できるのかなど、研究目的や方法に幾つかの疑問が生じる。今回は是非研究の視点をインテリアに向けて南面以外の団欒空間で快適に生活している事例の、インテリア計画手法の分析が知りたいところである。

002は食事と食事空間に対する意識から一般家庭における食事空間と食卓の演出の実態を求めることを目的とした研究である（正岡）。その結果、食事空間に対する考え方はそこで暮らす人の意識や生活スタイルと深く関わり合っていることを指摘している。本研究は一般化させるのではなく、年齢や職業、性別、ライフスタイルなど、生活者像の各要因との関係性を追求することで研究の意義がより深まり明確になるものと期待される。

003は2002年に完工した工業化住宅120件の平面計画の内容を把握するための平面計画評価項目の設定と、1985年建設の工業化住宅との比較における、現状把握を目指した研究である（横田他1）。その結果、平面計画の質的内容は時間軸で見えていくと、変化と不変化、集約化と多様化傾向がみられるが、最終的には54のチェック項目で把握できることを確認している。工業化住宅の変遷は庶民住宅の歴史でもあり、チェック項目で捉えると共に各時代の特徴的平面型を何パターンかに類型化する作業も重要である。今後の研究の展開が期待される。004は賃貸集合住宅でのペット飼育を可能にする方法を探り、実際に建設するためにその有効性を確認することを目的としている。ペット飼育不可78件、飼育可230件の賃貸住宅入居者への調査である（山内他1）。その結果、入居者に快適な住環境を提供する、オーナーの資産を保護

する、近隣に迷惑をかけないの3指標を得ている。今後、屋上緑化など植物も含めて考えることで、動植物との共生の幅が広がるような住環境整備の実現を目指して欲しい。（座長：北浦かほる）

口計画 (3)

009（李ほか）は、高齢者施設の個室に新たに局所照明を付加することで既存の視野条件を向上させる試みを通じて、空間のメリハリ、雰囲気向上、点滅操作性の改善、生活面の積極化が得られたとする報告である。これに関して、変更前後の照度の改善の度合いについての質問があり、改善後に局所照明直下で1000lx程度得られたと回答があったが、さらに同じ質問者から鉛直面照度で測定したことへの疑義が呈された。

010（岡野ほか）は、カフェ・喫茶店における利用者のテーブル・座席の組合わせの選好について、同伴者の有無にかかわらず人数より多めの席、及び壁が2面で接する席が好まれる傾向があるとし、さらに布スクリーンで席を仕切ることで、より好まれる席の選択範囲が増すと指摘していた。

011（白石）は、アンケートを通じて、家族の纏まり感の強い家庭と少ない家庭の比較で、纏まり感への必要意識、会話の機会の多少については纏まり感の家庭で多く、纏まりの場所については、その広さについては大差なく、日光の当たることと、くつろげる場所であることの方が大きな纏まり感の差異を生んでいると報告している。

012（國嶋）は、拡散光源、戸外風景のスクリーン、各種の透過率とひだの量を変えたレースカーテンで構成した疑似窓を通して、室内の被験者が外部から覗かれる被害意識を比較する試みであった。一般に60%の透過率の生地が良く、ひだの量を多くすると覗かれる感覚は少なくなるが室内は暗くなり、外部の視線を強く意識する場合は透過率を50%以下とするか、ひだを多く設けることなどが提案された。この実験は拡散光源であるため、太陽の直射する場合はどのように変化するだろうか、という質問に対して、直射光の場合の方が拡散光より外部からの視線に対してより有利であろうと予想される、という発表者からの意見が述べられた。（座長：小原誠）

口計画 (4)

013 . 014（松田・加藤。ただし加藤が当学会国際大会の打ち合わせに中国出張のため森越が代理発表）は、「空間の自己化とその表出に関する研究」の連続研究である。

013は、インテリアにおける自己表出の類型化を試みたものである。発話調査・プロトコル分析により、6つの《言語ユニット》（方針・機能・改良・感覚・日常・思い出）を抽出し、それらが自己表象（方針・改良・日常）及び自己対象（機能・感覚・思い出）の2種類に分類でき、更に3つの軸、意識軸（方針・機能）、行為軸（改良・感覚）、時間軸（日常・思い出）持つとした。分析・分類・構成は順当と思われる。しかし「自己表象」「自己対象」の言葉と内容にわかり難さがある。広

辞苑に、『表象：知覚に基づいて意識に現れる外的対象の像。』『対象：認識や意識などの意識作用が向けられる当のもの。』とある。「自己表象、自己対象」が最適な言葉かご検討いただくか、定義の必要があると思われる。

014は、前稿の「自己表出の類型化」を基に、しつらい者のパターン化と、インテリア（しつらい）行為の傾向について考察を行ったものである。前稿で導きだされたインテリア行為の背景の、意識軸、行為軸、時間軸について、時間軸は主体－客体、行為軸は能動－受動、時間軸は現在－未来の方向を持つとした。この3軸、6アイテムにおいて調査対象者を分析し、しつらい者に15パターンがあるとした。インテリア行為の傾向を、自己表出の4段階（未分化・自己満足・自己発言・自己表現）について、6つの言語ユニットの平均発話数によって示した。インテリア計画に興味深い研究である。今後は、しつらい者の意識を、計画、実現する方法論への発展が期待される。

015（秋吉ほか）は、日本大学学生の帰省先住居を対象に家族の就寝まわりの生活実体をアンケート調査した報告である。兄弟姉妹と本人が洋室でベッドの割合が65～84%、父母・祖父母の和室でふとんの割合が50～61%であったが、祖父母が和室でベッドの割合が35～37%となり、2000年の同様調査に比べて増加したことを指摘した。ふとん使用からベッド使用、和室から洋室への比率反転がいずれも9歳前後であると指摘した。最後に兄弟姉妹と本人の寝室が2階に、祖父母の寝室が1階にある割合が多いことを示した。父母は平均して、1階が43.5%、2階が56.5%であること示した。結果は順当と思われるが、会場質疑に出たように、また、発表最後に示されたように、住居形態、戸建てや集合住宅毎に、また、地域毎に調査・集計へと研究が発展することを期待したい。（座長：小宮容一）

□歴史 (1)

016（長山ほか）は、日本女子大学校に提出された論文「考現学より見たる一家庭」（小林孝子、1935年）を基に、昭和10年代の小林家の住まいと住まい方を家具、道具、日用品等のものと配置、暮らしといった綿密な記録から家族の生活領域を考察したものである。その結果、家族の序列と日常の生活および役割によって寝場所と居場所が決まり、その行動に関連して生活領域が形成され、緩やかな住み分けが成立していたことを指摘された。今後は、克明に記述した興味ある資料の紹介とその考察、この年代の前後との比較による視点からの展開に期待したい。

017（永田）は、礼法書系道具雛形にみられる産所建築関連の記述から出産に際しての建築と室礼について分析・考察を行ったものである。産屋建築については、儀式、材料、形状、間取り、室内意匠、臺目の場を含む外構等の要素に関して定則が記され、室礼についても、用いる布や絵、鍔金具などが白色を基調、空間設定の道具（高畳、枕、寄りかかり、屏風、棚など）、道具と室礼、道具の用法など幅広い特徴的な記述を指摘された。

今後は、礼法書系道具雛の記述に基づいた場面ごとの室礼に関する復元的な考察が期待される。

018（高橋）は、名古屋市東部における大正・昭和戦前期に建設された「和洋併立住宅」の洋風部分に着目し、その外観および室内意匠について考察を行ったものである。抽出した5棟から、矩勾配洋瓦葺の屋根、縦長の洋風窓など外観の基本的な特徴を挙げ、室内意匠については、窓廻りを中心に洋風に整える技法、天井廻り縁、天井照明取り付け廻りに施された漆喰の鏝の技法、ステンドグラスなど上流階級の住宅から中流層の住宅へ受け継がれていく様子を指摘された。今後は、町並み景観への影響、市民生活との関わり、設計者とデザインとの関係などといった展開が期待される。

019（山中ほか）は、今なおシナ織りが継承されている山形・新潟県境の関川、山熊田、雷地域を中心に、シナ織り布の伝承状況、継承されてきた歴史・風土的背景などを調査し、産地の今後のあり方などについて考察したものである。地理的な弥生文化への移行の遅れ、大和朝廷時代の村落の成立、近世の荒物屋での販売、俵約令と地域の関係、戊辰戦争時の当地、明治の大火などからシナ布を織り続けさせた背景を指摘し、シナ布の織りの表現の幅の拡大、天然染料の利用、若者への適応の方向性など今後のあり方について考察された。今後は、インテリアへの応用などの具体的な提案に期待したい。

（座長：牧田和久）

□歴史 (2)

021（高橋）は、家具・インテリアの面からC. R. マッキントッシュのデザインの変遷と思想の本質を明らかにする継続研究で、本研究は1903年までの活動初期の作品を対象としてデザインの特徴を考察したものである。マッキントッシュの早々期の箱物家具に見られた支輪、初期インテリアに見られる突出した支輪、支輪が特徴の椅子デザインなど支輪を用いたデザインは、マッキントッシュがヴォイジャーから受けた影響を独自のデザインへと転化させたものであるが1903年以降は現れていないことから、早々期から初期にかけての家具・インテリアデザインに見られる特徴であると指摘している。今後この特徴がなぜこの時期にしか見られないのかさらに掘り下げた展開を期待する。

022（金井）はモリス商会によるモリスチェアの成立と展開をアメリカを中心に述べたものである。背もたれの角度調節機構を持ったアジャスタブルバック・チェアはモリスチェアとも呼ばれ、モリス商会ではP. ウェブが、リクライニングチェアのスケッチを元にリデザインし1866年に発売した。生活共同体ロイクロフターズの1901年のカタログにはモリスチェアが掲載されるようになり、グリーン兄弟は1907年ブラッカー邸の家具の一つとしてモリスチェアをデザインするなど、類似のモリスチェアが多数流通し時代の最先端のデザインとして存在した。この形式が伝統文化の再発見やW. モリスとのかかわり、アーツアンドクラフツムーブメントの具体的なシンボルの一つとして運動の理念に追随する形で波及したと指摘した。

023（島崎他）は、武蔵野美術大学近代椅子コレクション『名作椅子130脚に座る』—椅子デザインの系譜と座り心地—展（2002年10月10日～27日、新宿リビングデザインセンターOZONE主催）で、実際の着座体験をもとに行なったアンケートについて概要と結果の考察を行った。アンケートは展覧会場内で実際に椅子に着座しながらその実感を記入したもので来場者1万6千人強、有効回答数は9861件、椅子やデザインに興味ある10歳代から70歳代の広域に渡るデータを採集した。本研究では、Q1見た目の良かった椅子Q2すわり心地の良かった椅子Q3好きな椅子の3項目について報告され、年齢、性別、地域性などとの関係も明らかになっている。展覧会会場の混雑した中という限定された条件の下でのデータ採集ではあるが、その内容は多岐にわたり興味深いものである。さらに詳しい分析が期待される。

なお「020 大阪城本丸御殿白書院連歌間障壁画〈武隈松図〉に関する一考察」は発表がありませんでした。
（座長：長山洋子）

□人間工学（1）

024（清ほか）は、日常生活における座席の前後に要する歩行スペースを「あき寸法」に着目して実験により明らかにしたものである。その結果、身体の周囲には20cm程度のあき寸法を要することが明らかになった。このあき寸法は、いすやテーブルなどの高さに影響を受けると考えられるので、この条件を加味して更なる研究を期待したい。

025（嶋崎ほか）は、量販店で使用されているPOSカウンターの作業分析をもとに問題点と改善点を明らかにしたものである。その結果、作業者の8割は身体的負担を訴えており、作業環境の改善は急を要する。カウンターを介して作業者と顧客の両者のニーズを満足させるところに改善の難しさがあるが、作業者にウエイトをおいた改善点を明らかにし、顧客のニーズをその中に盛り込むことが重要と考えられる。また、カウンターと機器の配置も再検討の余地がある。顧客には身近な場であるため、今後の研究成果に期待したい。

026（岸本ほか）は、直階段における曲がり部分の割付方法と昇降動作の連続性について、勾配の大きさ、勾配の変化率、踏み面、歩行ルートの観点から明らかにしたものである。その結果、段板の分割数の少ないものほど連続性が低くなり、昇降のしやすさは、歩行ルートの違いが大きく影響することが明らかになった。階段の曲がり部分では、下肢にひねりが生じるため、身体負担の観点も含めて更なる継続研究に期待したい。

027（建部ほか）は、男子小便器の床面の汚れ防止対策を地道な調査結果をもとに、簡易な方法で検証し、その効果を明らかにしたものである。その結果、芳香ボールの使用や注意書きが効果的であることが明らかになった。この研究は、簡易な方法であっても使用性向上が図れることを示唆したもので、030（塚越ほか）の一連研究と共通するところがあり、実態調査・改善提案・改善実施・改善評価は、今後の研究に対する新しい方向性を示したものと考えられる。
（上野義雪）

□人間工学（2）

028（佐藤ほか）は、素材が異なる4種類のベッド用マットレスを対象に、その物理的特性の違いや感覚評価などについて実験的に比較検討した。その結果、荷重とたわみ量の関係は、普及型のシングルスプリング（SS）とダブルスプリング（DS）の差が認められず、介護用と低反発マットレスの差が顕著であった。また、ソフトボールの跳ね返り高さや時間の関係からの反発力の比較では、低反発マットレスが最も柔らかく、介護用マットレスが最も硬かった。感覚評価では、低反発マットレスにおける寝返りのしやすさの評価が低く、総合的に判断するとSSおよびDSマットレスの評価が高かったことなどが報告された。

029（大図ほか）は、前報と同様のマットレスを対象にして体圧分布や寝姿勢などについて実験的に検討した。

その結果、体圧分布の実験からは、硬いマットレスほど身体突出部に高い圧力がかかって接触面積が小さくなり、柔らかいほど接触面積が広くなることなどが検証された。

最終安定姿勢を石膏を使って型取りをした実験の結果、腰部のアキは、介護用マットレスが最も小さく、低反発マットレスが最も大きかったが、SSとDSマットレスはいずれも既往の研究で適当とされる2～3cmの範囲であった。また、寝返り回数の実験結果からは、介護用マットレスの回数が多くなり、低反発マットレスの回数が少なくなったことなどが報告された。

030（塚越ほか）は、バリアフリーやユニバーサル・デザインなどの視点から千葉工業大学を事例にして実態調査などを行ってきた続報である。特に、本編は、廊下の照明器具が白昼でも点灯されたままになっていることに着目して、学内施設の廊下照明を対象に点灯・消灯の実態について調査（継続中）したものである。その結果、当該施設の1階は、出入口で通行量が多いためと採光面で不利があるせいか上階よりも点灯が多いことや、廊下照明器具の使用実態は、天候に関係なく点灯されたままになっていることが多いことなどが指摘された。これらの消費電力の実態を踏まえて、省エネルギーの観点からも、相当の節減が求められることを報告したものである。

031（赤塚ほか）は、キッチン用加熱機器（コンロ）の操作性について、アンケート調査や比較実験を行ったものである。実験用コンロは、市販のガスコンロ3台とIHコンロ2台の計5種類とし、被験者は20代の若者や高齢者など25名であった。本実験では、各コンロの操作手順にもとづいて被験者に操作してもらい、その際の操作時間や操作姿勢などを記録するとともに感覚評価のアンケート調査を行った。その結果を5種類のコンロの操作性の違いごとに問題点および改善点として一覧表にまとめて報告した。今回指摘された改善点等をもとに、より操作性の良い製品開発に繋がることを期待したい。

（座長：若井正一）

□教育 (2)

036 (武田ほか) は、高層ビルにおける学習環境の研究である。駅前高層ビル内の単位制高等学校を対象に、居場所やインテリアイメージについての実態調査と意識調査を行っている。結果として、休み時間の居場所は時間が長いほど教室内の滞在率が低くなること、教室での着座位置は嗜好では後方窓側だが実態は後方廊下側に分布が多いこと、インテリアイメージは教職員が閉塞感や圧迫感を感じているのに対して生徒は概ね好印象を持っていること、施設に対する評価では眺望や立地上の利便性を挙げているもののエレベータ台数の不足やフリースペースの必要性などが指摘された。今後、高層ビル内の学習環境の問題点についての検討を加え、実用性に対応した展開が望まれる。

037 (迫坪ほか) は、大学研究室の作業空間およびエレメントの研究である。主としてデスクにおける作業面についての機能検討を行い、抽出された問題点改善のためのサポートシステムを考案し、さらに試作品によって検証を行っている。調査結果から、作業面の問題点として、PCとその他の作業の棲み分けが不明瞭!であること、プリントや文献資料の積み重ね行為があげられた。これらを解決するための方策として、甲板部に設置する作業台を考案した。これはスライド形式で、作業面になると同時に資料の一時保管スペースを生み出す仕組みである。検証の結果、使用要領を修得するのに時間を要すること等が問題として指摘された。作業面の高さも含め、今後の改善に期待したい。

038 (播磨ほか) は、幼児用椅子の設計を目的とした調査研究である。幼稚園における幼児用椅子の使用に関する調査を行い、その結果を踏まえて椅子の試作を行い、さらに検証を行っている。調査の結果、幼児が自発的に行う椅子での行為は「遊び」であるのに対し、保育士や保護者は「しつけ」と「安全性」を求めている。そこで、幼児の行動特性である「遊び特性」を重視して、椅子の試作品を制作し、検証を行った。試作品を使用した調査では、概ね評価が高く、また幼児の様々な使用状況が窺えた。詳細な調査分析を踏まえた上でのアイデア作品は力作であり、今後の展開が楽しみである。

(座長：片山勢津子)

□プロダクト

039 (鈴木ほか) は、東北の地場産業活性化及び伝統工芸品の新たな製品開発の可能性を「素材のデザイン」という観点から具体的製品化及びその波及効果まで報告されたものである。地場産業の現場調査に職人の加工製作現場を写真撮影する方法が挙げられた。カメラを通して技を記録するという方法が職人の技能の認識をより強固なものになったことが指摘された。今回は具体的テーマとして「大館曲げわっぱ」に絞り込まれ、円筒形状の下部にアーチ形状のデザインを製作された。今までの単純な円筒形状から、新たな形状の展開は要素が単純な製品だけに大きな成果があった。海外発表とJRの観光地PRに寄与したことが報告された。具体化の成功は、市場の成功に向かって新たな展開が起こる一つの例として貴重

である。地場産業と大学の共同作業における成功例として今後の新しい領域への発展が期待できる。

040 (湯本ほか) は、産学連携による新製品開発プログラムの実践的研究の報告である。学生を若者のモニターとして位置づけると同時に、産業側が考える既成のライフスタイルから若者の生活様式を手がかりとする新製品開発が行われた。学生チームは修士課程の専攻別に製品内容と相関して5種類の製品別にチーム編成され、行為と時間・空間によるチェックがなされ個々の製品別に具体的提案がされた。結果はソーラ・ライトが製品化に採択され現在進行中であることが挙げられた。この種の開発計画では製品の種類(構成要素数及び革新性の評価基準、先行製品の完成度等)によって開発の難易度が異なる。今回は、経験の浅い学生が具体的に製品化までに至ったことが指摘された。今後他の製品についても具体的成果を期待したい。

041 (山口ほか) は、少量生産の手法CAD/CAMの有効性について、車いすを具体例に報告された。構造用合板から切削加工された平面材による積層・接合による試作車いすについて走行性能等について評価されたものである。その結果、走行・耐荷重では問題がないことが指摘された。しかし車輪・ハンドリムの振れ試験や耐衝撃性試験等で不適合が挙げられた。原因は、車輪部周辺で発生したことが指摘され、ハンドリムの強度・変形の実験も兼ねて、スポーク形状が一本のハンドリムと車輪との変形を比較された。室内での使用実験結果は、家具的観点で問題がないことを指摘された。しかしハンドリムと車輪に変形が見られ振れ幅が検出された。原因は、ハンドリムとハブの接合部分に問題があることが解った。しかし木製の車いすの集中応力負荷部分の改善で解決できることが指摘された。今後の継続実験による結果に期待される。

042 (伊藤ほか) は、下肢障害者の作業デスク周りを中心とした執務環境のデザイン要件を「羽曳野市立陵南の森生きがい情報センター」を対象にヒアリングによる空間調査と利用者アンケート調査の評価を行ったものである。ヒアリング内容はワークプレイスを「人—モノ—環境」の関係と「今後の動き」の4項目でとらえ9項目のカテゴリーを指摘された。ヒアリング結果ではセンターの目的と利用者の意識に相異があることが挙げられた。アンケート結果からはデスク作業域とパソコンの関係、体格差及び障害の種類によってデスクに対する問題意識の感じ方が異なることの指摘がされた。今回の総合評価では就労意識を高める運営面のソフトの重要性が指摘されハード面では利用者個々の条件が多様であることから重要度のランキングが大切であることが指摘された。今回の対象では状況によるレイアウトの順応性、デスクスペースの変生、通路幅の十分な確保が重要であることが指摘された。今後も他のケースについての展開が期待される。

(座長：井村五郎)

□音環境

このセッションは音環境に関する4題である。発表者の都合により発表順序を入れ替えたが、以下の講評は、

梗概集の番号のままの順に述べる。

043は、音の位相操作による消音方法を採り上げた研究。インテリアにおける有効な環境改善手法となりうるテーマではあるが、すでに知られている原理的な考察にとどまっている。今後の開発研究あるいは実用化研究への発展を期待したい。

044は、デザインされた音を視覚的な媒体で展示する試みについての報告である。研究報告的な要素もなくはないが、むしろデザイン・設計の報告として受け止めるべきものであると思われる。その意味で、興味深く聞いた。今後、研究として発表するのであれば、客観的に捉えた知見に重点をおくべきであろう。

045は、木造住宅に取り付けられた複層ガラスの遮音性能について、特にその経年劣化を実測した研究報告である。貴重なデータが捉えられており、興味深い、その本当の原因を究明するところまでは至っていないのが残念である。今後の研究の深化に期待したい。

046は、やはり木造住宅において、一階土間コンクリート床を浮き床的な構造にすることにより、ピアノ室の遮音を図ろうとした工夫をテーマとしたものである。原理はもちろん知られている防音方法であるが、それを実際の住宅構法に適用し、その効果を実証したという意味で、貴重な報告といえる。

いわゆる環境工学的な問題には、ここで報告された音環境の問題以外に、光環境、温熱環境、空気環境などがあり、インテリア学においても重要な分野であるはずである。しかし、残念なことに、この大会も含め、総じて研究発表が少ない。現実的にいえば、建築学会での研究発表との関係がそうになっているということなのであろうが、それでよしと考えるのかどうか、悩ましいところである。
(座長：直井英雄)

□環境 (2)

環境2及び色彩というセッションの座長報告であるが、それぞれの報告の前に、このセッションの設定について、一言申し上げておきたい。

私の担当セッションは2つあって、「環境2」の後半(?)の座長に設定されているのだが、このセッションの発表は2題のみで、じつは前半の1題というのは私自身の発表なのである。通常は、セッション分けを遣り繰りして、セッション内の発表者を外して座長を決定(近くのセッション内の発表者から選択)するのが妥当であろう。

発表前に異議を申し述べる機会が無かったが、私自身は自分が配置されたセッションで、発表者として討論する権利を奪われた(座長という形で口を封じられた)とも言える。恐らく、同カテゴリーの発表のグルーピングに苦しんだ結果とは推測するが、そうした場合には、より大きいグルーピングを選択することが原則であり、やや奇異な感じを持ったことは否めない。

決定という形でしか事前に受け取れなかったため、事前にアクションできなかったが、今後の課題として受け止めて戴ければ幸いである。

051「半導体ガスセンサーによる学校教室空気質の連

続モニタリングについて」学校教室において(も)、室内空気汚染が問題視されて来ており、背景には『室の気密性向上』と『汚染物質の多様化(増加)』がある。従来、そのモニタリング指標としてCO₂が用いられて来たが、発表者は『より簡便に測定すること』と、『測定機器寿命を長く出来ること』の2つによって、CO₂と共に変化するH₂を捕える半導体ガスセンサーにより、どの程度の空気質変化が捉えられるかを、実験的に調べたものである。安価で簡便なセンサーを代替的に使えることが言えるようで、この結果を吟味しつつ社会的に役立てて戴きたいと思う。但し、『室の気密性向上』に対して適宜換気を行うなど、生活習慣も含めた解決を考えて行かないと、止め処が無いコストを要することにもなり、注意が必要であろう。
(座長：湯本長伯)

□色彩

052「産科病棟における患者サービスと情報提供に関する一考察—廊下にある掲示板の工夫をして—」数年間発表を続けておられる継続的研究の一つで、医療と空間環境の両面に渡る総合的な病棟環境の改善研究である。今回の報告は、適切な情報提供が患者の一般的状況を改善し、医療にも良い影響を与えるであろうことを前提に、試みと反応を実験調査し考察したものである。

試みとしては端緒についたばかりであり、まだまだ様々な工夫が考えられようが、意外にその影響や実験的試みは認識されておらず、また検証もされていないという指摘は頷けるもので、今後の展開が期待される。

053「従来とは異なる色彩環境の体験がおよぼすもの—リハビリ病院における仮説に基づく色彩計画実施例とその検証」要旨は、従来の理解の中で無難に設定されている色彩計画に対し(極めて選択肢が狭められる、どこも同じような計画になる、などの弊害の指摘は従来からあるが)、少し違った案を採用してみたところ、必ずしも否定的な反応ではなかったという報告である。そのこと自体は頷けるが、やや多過ぎる内容を1題で発表されようとしており、更に整理を進めて戴けると、他の事例でも適用可能なものとして、参考出来るものとなる。今後の展開を期待したい。

054「屋内における印刷木目の経年色彩変化」画像技術を用いて様々なサンプルを作り、実際に被験者検証することで、「印刷木目の経年色彩変化とイメージの関係について考察する」ことを目的に実験研究したものである。従って、梗概題目と報告内容に少し差異があり、梗概を事前に読んだ時点では、分かり難い面があった。内容的にはトライアルを更に充実して、今後の事例充実と考察・整理に期待したいと思うが、方法論的には「画像工学」をインテリア分野の「環境研究」に応用するものとして、今後の展開が期待されるものと思う。

なお以上のセッションは、前からの時間的遅れが累積していて、かなりのプログラムとのズレがあった。何かあって遅れることはやむを得ないが、そうならない努力と、なってしまった場合の復元ルールを、座長懇談会などで議論しておくべきである(発表時間の個々人の権利確保とその他の参加者の聞く権利との調整など)。他の

会場をも併せて、時間のズレが目立った印象もあるので、対応策は必要と思う。（座長：湯本長伯）

B. パネル発表部門

ロデザイン・設計

055（井村ほか）は、従来の踏み台の問題点を解決するとともに、踏み台面（座面）にコア機能をもたせたスツールを提案した。脚部や取っ手を自由に固定するコアとしてのスリット構造座面は、部品交換による多目的な使用形態を可能とするだろう。

056（尾形ほか）は、折り畳み方式の家具による仮設空間構成への適応の提案として、折り畳み収納家具にテントの構造を付加することにより、フリーマーケットなどの仮設店舗や各種展示会への適応イメージを提示した。今後はより実用に対応した展開が期待される。

057（松崎）は、座面と背もたれの各支持面をユニットに分割したシステムチェアを提案した。各ユニットを同形状とすることで生産コストを削減すると同時に、その組み合わせにより5種類の形状を可能としている。フレーム形状の検討により、さらなる展開が期待される。

058（武田ほか）は、自然光による空間演出の方法として、開口部からの直接光ではなく、空間に立体造型物のような半透明のフィルターを貫入し、それに導かれた光による方法を検討した。モデルによる光りのシュミレーションは、自然光の新たな活用方法の可能性を提示するのに極めて効果的であった。

059（伊藤ほか）は、ツアーショップという、固定の店舗を持たず、移動しながら営業する店舗形態のための

移動可能な仮設空間を提案した。その素材として採用されたストレッチファブリックは、空間をやわらかく囲う要素であると同時にフレームを構造的にサポートする要素でもあることにこの提案の本質が感じられた。

060（今井ほか）は、1973年に建設された草平庵（森田草平記念館）の再生あるいは蘇生のプロジェクトの基本計画の過程を報告した。そのキーワードとして、川の記憶のデザインという概念を構想し、スケッチ案と模型写真によって説明した。実現が待たれる。

061（伊藤）は、子育てを終え、夫婦二人となったことを契機に完全リフォームした事例を報告した。前提条件から導き出したデザインのビフォー・アフターを図面と写真を並置して紹介した手法はわかりやすかった。このようなライフスタイルの変化にもとづくリフォームの重要性はますます高まるだろう。

062（渡辺ほか）は、高島町庁舎通りの「メルヘンをテーマにしたオブジェの設置」にあたって、サイン形式による街路景観形成を試みた。物語りをサイン形式のシンプルな平面構成に落とし込み、ステンレスのレーザーカットによる切り絵形状とした手法は、具象に陥りやすい対象をクールに解決している。

063（小野ほか）は、上記のオブジェの具体例およびその設置効果について報告した。32話にわたる童話のモチーフを5つのカテゴリーに分類することによって変化のある画面構成を達成している。またステンレスにマーキングフィルム貼りという素材の選定も、シンプルでありながら変化に富んだ表情を見せることに成功した要因のひとつであろう。（座長：鈴木敏彦）

■中国インテリアデザイン学会年次大会 （南京）に参加

国際委員会委員長
加藤 力（宝塚造形芸術大学大学院）

2003年11月5日～6日、丁度東北芸術工科大学における第15回日本インテリア学会大会と重なるかのように、中国インテリア学会年次大会（正式名：中国建築学会室内設計分会2003年南京国際交流会）が中国、南京市で開催された。日本インテリア学会に対し、参加の可能性を打診されたため、国際委員会委員長、加藤 力が、AIDIA（アジアインテリアデザイン学会）東京大会の打ち合わせと広報を兼ねこの会議に参加した。

中国インテリアデザイン学会（CIID）は大会タイトルにもあるように、中国建築学会の一分科会として構成されているものであるが、それでもさすがに広大な中国だけあって、会員数は約3000名を数え、この大会にも中国全土、台湾、香港、マレーシア、シンガポールなどから約1300人が出席、盛大に大会が執り行われた。大会テーマは「環境」。中国インテリア学会でも昨今、環境問題の取り扱いが大きな関心事であることがうかがえ、二日

間にわたり早朝から夕刻まで、中国、香港、台湾、マレーシア、イギリスなどからの研究者、デザイナー、都市計画家など招待講演者による講演会が催された。この他、交流会、CGによるインテリアパース展、インテリア建材展などがあわせて、双門楼ホテル内で行われた。

パーティーに先立つ交流会議で、参加者に対し日本インテリア学会を代表しての挨拶と今年に開催されるアジアインテリアデザイン学会東京大会の宣伝・広報をおこなった。

尚、昨年8月開催予定であった上海、同済大学での学生ワークショップはSARSのため今年に延期されたことが、報告された。

■今年、アジアインテリアデザイン学会 東京大会が開催されます！

AIDIA東京大会実行委員長
加藤 力（宝塚造形芸術大学大学院）

今年の10月、いよいよ東京で、第3回AIDIA（アジアインテリアデザイン学会）国際会議が開催されます。その概要について以下のご報告をいたします。

1. 期 日：2004年10月10日（金）
2. 場 所：東京国際展示場（ビッグサイト；東京都江東区有明3丁目）
3. 内 容：国際シンポジウム、交流会、作品展示会、その他
4. テーマ：人間（HUMAN）・環境（SURROUNDINGS）・デザイン（DESIGN）
5. 参加国：中国、韓国、日本、台湾、香港、マレーシア、等
6. 大会事務局：東京大学大学院、工学研究科建築学専攻、西出研究室

この国際会議は第4回IPEC21（10/13～15）および第16回日本インテリア学会大会（10/15～16）と同時開催を予定しています。

すでに大会実行委員会（委員長：加藤力）が立ち上げられ、事務局（事務局長：西出和彦）を中心に開催に向けてその準備を進めています。とりわけ予算規模が大きく、多くの寄付・補助金等が必要となるため、今後、財務委員会（委員長：佐戸川清）の活動が重要になります。この国際会議には論文集（英文）（委員長：直井英雄）と作品集（委員長：鈴木敏彦）を編集・発行します。また、広報委員長（対外：島崎信、国内：湯本長伯）ら各位を中心に作業が進められることになっています。

会員の皆様の本国際会議への多くのご応募とご参加を期待いたします。論文の締め切りは2004年7月末、作品集の締め切りは2004年9月末です。これらの詳細につい

ては追って順次お知らせいたします。

ところで、AIDIA（ASIA INTERIOR DESIGN INSTITUTE ASSOCIATION）はアジア各国のインテリアデザイン学の確立や発展を目的として、相互の情報交換や人的交流、さらにはデザイン技術の向上をめざすための活動機関として2000年2月に韓国、中国、日本の3国間で相計り設立された国際学会です。隔年ごとに国際会議の開催が行われることになっており、現在、台湾、香港などが加わり、以下のような活動を行っているものです。

1. アジアインテリア学会国際シンポジウム及び交流会の開催
2. アジアインテリア学会国際学術論文集（審査付き）の編集と発行
3. インテリアデザイン作品集の編集と出版
4. インテリアデザイン作品の国際コンクールと表彰、および作品パネルの展示
5. 学生間の国際交流及びワークショップなどの企画、運営、支援
6. 各国インテリア学会の相互交流
7. その他、以上を実行するための国際会議の計画と実施
すでに、次のような2回のAIDIA 国際会議が行われております。

それは2000年2月20日～22日に韓国、ソウル市で第一回アジアインテリアデザイン学会シンポジウムが開催されました。テーマは「文化とデザイン」。第2回シンポジウムは、2002年10月22日～24日に中国、西安市で開催され、テーマは「環境」。この国際会議でAIDIAの学会事務局本部は韓国から中国に移転し、現在、アジアインテリアデザイン学会会長は中国インテリアデザイン学会会長（張 世體）が勤めています。会員皆様にはこの国際会議開催につき何卒ご協力とご参加、をお願いする次第であります。これらの内容についてはこれまでも理事会、その他で報告してまいりましたが、会員各位の一層のご理解とご協力をお願いいたしたく、お伝えいたします。

■「インテリア学大系」の編集企画について

インテリア学大系編集WG：小原 誠（文化女子大学）

インテリアに関わる者として、いつも建築とインテリアの違いは何なのかという疑問が頭の中に引っ掛かっている筈である。建築術はローマ時代から「大いなるわざ」であったから、工業デザイナーのR. ローウィーの「口紅から機関車まで」の言い方を借りるなら、建築は「都市計画から建築金物まで」なのである。しかしながらその傘が大きすぎて、その内部に住居学、構造学、室内環境学のように、確立した学のサブシステムを持つようになった。インテリアもまがうことなく、建築学のサブシステムであるが、構造学や室内環境学のような明確

な体系を持っているとは言えない。とくにデザインを包含すると学的体系を形成し難くなるように思われる。

そこで、今春、改めてインテリア学とは何か、と言うことを世に問うような叢書を出版しようではないか、という企画が計画・構法研究委員会のなかで提案され、既刊の「建築学大系」になぞらえ、名称は「インテリア学大系（あるいは体系）」としようということになった。最初の発起人は栗山正己氏、その後木村戦太郎、湯本長伯、渡辺秀俊の各氏と共に編集方針の検討に入った。叢書としては10巻程度とし、第1巻は「インテリア学概論」としようということになった。とくに第1巻はインテリア全体を展望するために、既刊書に対してひと味違う視点で構成しようということで、ひと、もの、空間の関係で論述しながら、人々の行動態様を規制する慣習・

規範などの諸条件についても取込んだインテリア学を記述しようではないか、そしてそれら関係が感じ取られようなデザインが目指せないだろうか、というようなことが論議された。古い「しつらい」と言う言葉も、儀礼と深く関わっていることを想起したい。平成15年11月8日の理事会の際に、高橋会長がモラルとインテリアの関連の重要性について問題提起されたことも大いに関連する。

■平成15年度第2回理事会議事録

総務委員会：上野義雪（千葉工業大学）

日時 平成15年11月8日（土）13:30～17:00
会場 かみのやま温泉月岡ホテル
出席者 高橋 島崎 小原（二） 直井 岡島 内藤
北浦 渡辺 湯本 小原（誠） 栗山 若井
渋谷 木村 佐戸川 清水 日原 藤城 上野
塚越（記録）

進行役 上野

記録 塚越

配付資料

1. H15年度日本インテリア学会理事会議題（上野）
2. AIDIA日本シンポジウム2004の概要（加藤）
3. H15年度第2回理事会のためのWG議事録（上野）
4. AIDIA日本大会開催概要（加藤）
5. 日本建築仕上学会基金（栗山）
6. 日本インテリア学会会報NO. 29
7. 学会活動に関するアイディアのいくつか（高橋）
8. 日本インテリア学会の系譜（上野）
9. 賛助会員候補リスト（小原誠）
10. 賛助会員候補リスト（上野）
11. 人間工学部研究会案内（人間工学部会）
12. 入・退会会員リスト（藤城）
13. 計画・構法部会報告（栗山）

高橋鷹志会長の挨拶ののち、審議を開始した。議事に先立ち、理事会開催に必要な理事の定足数確認を行った。

資料3「H15年度第2回理事会のためのWG議事録」を参照に議事を進めた。

1. 学会経費の件

学会の運営経費がそこをつく状況で、藤城事務局長が立て替えを余儀なくされている状況を説明。

その原因は、会費未収と会員数の減である。

会費未納者には再度、督促する。また、会員増強のための方策を検討し、実施する。

準会員の場合、会費請求時に大学院等卒業後の入会継続の意思確認を行う。理事会申し合わせ事項として、2年間で退会扱いとすることも考えられる。

支出をおさえるには、郵送費や会報等の印刷費の削減などが考えられる。本年度の大会案内は、郵送から宅配

インテリア学会としてこのような叢書を出すには会員諸氏の意向も伺う必要があるので、三月下旬本大系の出版方針について意見交換会を開くこととし、とりあえず関東支部の会員に案内を出す予定である。各支部におかれても、このような叢書の出版企画に対する支部会員諸氏のご要望をまとめていただければ幸甚である。総意が得られれば新年度より学会内に編集企画委員会を発足させることとしたい。

便に切り替えた。

栗山氏から郵送された資料「日本仕上学会基金」の検討も考えられる。

11月5日現在の正会員569名、準会員42名、賛助会員20社、会費納入者数は約7割。

準会員の卒業後について継続か否かの確認、卒業後の会員種別変更の円滑化が必要。

2. 第16回JASIS大会・AIDIA日本大会開催の件

加藤AIDIA日本大会実行委員長が中国インテリア学会大会において開催されるAIDIA次年度検討会議に出席のため、加藤氏作成メモをもとに討議が進められた。

AIDIA日本大会とJASIS大会を分けて考えるが、IPEC21の日程にあわせる方向で検討する。日程（11月20～22日頃）等については、加藤氏の帰国を待って、会長補佐会議において決める。JASISの平日開催は、授業等の関係から避けてほしい、JASISの見学会をAIDIA大会に当ててはどうか、等の意見があった。

加藤実行委員長の補佐役を関東地区から選出する。

JASIS大会の責任者を小原誠先生、会場を文化女子大、日大会館などが考えられる。

AIDIA大会役員を、大会長：高橋、事務局長：藤城、運営：デルファイ、財務委員長：佐戸川、プログラム委員長：直井、渡辺（補佐）、広報委員長：湯本、大会実行委員長：加藤、補佐複数名を関東地区から（ex. 島崎）、展示委員長：鈴木敏彦、作品集作成担当者：直井、募金担当者：佐戸川氏に決定。

AIDIA大会テーマ「デザインの固有性」：曖昧すぎる、曖昧である方が参加しやすい、適切ではない、明確で興味をもてるテーマが必要、参加費（10,000円？）に見合った内容参加主体は誰か、などの意見が出された。加藤氏の帰国後に検討する。

参加者に企業やIPなど、学会以外のメンバーを視野に入れる。ただし、発表は、JASIS会員のみを対象とする。

JASIS大会に、通訳や英文梗概が必要か。

参加費に論文集代、作品集代等が含まれるか。各ボリュームによって決まるのではないかと。予算を予め決めておく必要がある。加藤氏の帰国後に検討する。

募金を募る必要あり、企業・団体等は佐戸川氏が担当、個人会員については今後検討する。

賛助会員の参加を考慮、ただしAIDIAとJASISの会費徴収は要検討。

3. 学会ホームページの開設

仮の学会HPを湯本広報委員長により開設された。開設のための予算措置は、今年度は難しい。実際の運用には年間十数万円の費用がかかる。事務局として運用する場合、ハードの予算措置も必要になる。

湯本委員長に費用面等で迷惑がかからないのであれば、今年度は湯本氏のご好意に甘え、試行的に運用する。HPの記載内容、運用等については、広報委員会で検討する。

当面は、各支部や部会、委員会等の連絡用として使用し、実際の管理は湯本研究室が行う。次年度から学会で費用の負担が必要になる。

今現在「インテリア工事標準仕様書」を掲載中である。

4. 学会活動の活性化

(1) 高橋会長のメモをもとに議事を進めた。

①活動目標「持続的環境としてのインテリア」、②年齢別インテリア学習プログラムの研究（マナー、しつけ等）、③インテリア環境診断士制度の検討、④ビルディングタイプ別インテリア・デザイン潮流の把握、⑤インテリア・建築デザイン事務所のインテリア探訪、⑥行動場面における作法・礼法の模索（数年にわたり展開したい）、についての説明がなされた。

⑥は、AIDIA大会のテーマとして考えられる。

今後、学会活動の一環として、実施の方向で検討する。

(2) 他団体等の協力体制

他団体との協力体制を整備し、協賛などを積極的にはかる。

(3) 部会・支部活動

部会・支部活動の活性化については、部会の再編をWGにおいて検討する。また、活動の停滞している支部等への対応を今後検討する。

部会・支部に対する予算配分は、適正配分が必要となり、活動計画、予算計画、活動報告、予算報告などを総務から徹底させ、実績配分も視野におく。

(4) その他

研究協議会において、短期的計画ならびに長期的計画の提出を依頼する。

若い人を育てる活動が不可欠である。

IPやIC等の資格者への呼びかけも重要。

賛助会員の勧誘については、各理事作成の入会候補企業名をもとに勧誘方法等について検討する。

学会パンフレットの作成は、会員増強には欠かせないため、広報委員会を中心にWGで検討する。

会報等の発送時には、入会申込書を同封する。推薦者の人数など入会申込書の内容を検討する。

今後、学会活動の活性化実践に向けて、会長補佐会議やWG開催が頻繁に開催される。学会の特性を考慮すると女性会員をメンバーに含める。

5. 社会的認知度の向上・会員増強

NPO法人化により、研究助成や委託研究が受けやすくなる。法人化の会則（定款）が必要になる。

日本学術会議の認可は、学術団体として認可されるもので、学会としては必要であろう。毎年度の募集でないため、そのタイミングが難しい。

何れの場合においても、本学会の地固めが前提となり、学会活動の活性化や事務局体制の整備を優先させることが重要である。WGにおいて両者の検討を行う。

社会的事業の展開として、出版や公開セミナー実施など、社会への貢献を目指すことも必要である。

教育の場以外における子供参加型の体験活動の計画。

一般会員を増やすには、企業からの理事を増員することが有効である。会長指名など会則では可能である。今後は賛助会員の参加が重要になり、賛助会員の意見をもとに、会長補佐会議で検討、理事会の議題とする。

6. 事務局体制

事務局への電話連絡を確実にすることが重要である。湯本氏の好意に甘え、電話代行とHPの使用を当面の間、試行する。

事務局を東京大学西出研究室に移転する方向で検討する。

7. 部会報告

歴史部会：見学会の実施

人間工学部会：研究会の実施

計画・構法部会：『インテリア学概論』の出版を計画中。理事会として承認。

デザイン部会：メールによる情報交換を計画。

生産・流通部会、教育部会、住宅部会、CAD部会

8. 支部報告

北海道支部、東北支部：各種行事の計画

関東支部：会報の発行、東海支部、北陸支部、

関西支部：見学会の計画

中国・四国支部、九州支部

9. その他

大会研究発表梗概集の事前配布の検討。

本理事会の検討事項については、会長補佐会議、WGにおいて検討を進める。

10. 第15回大会開催について

大会開催に際し、日原大会実行委員長から挨拶。大会日程の決定や梗概集の事前発送などについて要検討。

■運営委員会だより

□総務委員会

委員長：上野義雪（千葉工業大学）

総務として、学会活動の活性化ならびにAIDIA開催に向けて後方支援を行っている。学会費の未納徴収、本年開催のAIDIA参加など、全会員の協力を仰ぎたい。

□広報委員

委員長：湯本長伯（九州大学）

広報委員会は、学会の広報及び公聴機能を分掌しております。新年に当たり、要点のみご報告致します。

1) 会報

大会関連の内容を中心に、会報30号（本号）を発行しました。今年度の今後の予定は、総会前に年報を発行予定です。大会関係の座長報告は、学会活動にとっても大切なものですから、座長の先生方のご協力に感謝すると共に、会員の皆様におかれても、色々のご意見をお寄せ戴き、より良い形式や内容に近づけて行きたいと思えます。宜しくお願い申し上げます。

ご意見を戴ける場合は、編集委員会の渡辺あるいは白石までお願い致します

（宛先：会報watanabe@bunka.ac.jp、
年報shiraish@oyama-ct.ac.jp）

2) ホームページ

先の会報でお知らせしましたように、連絡用・事務用のデータ等を収納した事務ホームページを開設致しました。当面は、主に連絡や会合の情報等の周知に、ご活用下さい。正式なHPの開設については今のところ目処が立っておりませんが、取り敢えず実質的な不便の無いよう致しますし、出来るだけ急いで学会内の調整を致します。

インテリア学会・事務ホームページ URL

[http://www.kyushu-id.ac.jp/KID/DRC/InetPub/JASIS/\(index.html\)](http://www.kyushu-id.ac.jp/KID/DRC/InetPub/JASIS/(index.html))

前回お知らせしましたこのURLは、下記HPへの入り口です。

[http://www.kyushu-id.ac.jp/~ymtlab/JASIS/\(index.html\)](http://www.kyushu-id.ac.jp/~ymtlab/JASIS/(index.html))

事務ホームページのメインURLです。

[http://www.kyushu-id.ac.jp/~yumoto/JASIS/\(index.html\)](http://www.kyushu-id.ac.jp/~yumoto/JASIS/(index.html))

上記のミラーサイトです。同じ内容が入っております。上記に事故ある時、ご利用下さい。

なお、<http://www.kyushu-id.ac.jp/>は、

<http://www.design.kyushu-u.ac.jp/>と同じです。

（なお一年以内に、完全移行しますので、ご注意下さい）

ご意見を戴ける場合は、編集委員会の湯本／九州大学までお願い致します。

（宛先：yumoto@design.kyushu-u.ac.jp、アドレス変更しています）

3) 工事標準仕様書・試作版の件

なお、現在HPには、構法・計画委員会のマネジメント

による「工事標準仕様書」の試作版が、公示されております。是非ご覧になって、ご意見をお願い申し上げます。

<http://www.kyushu-id.ac.jp/~ymtlab/JASIS/kindex.html>

ご意見を戴ける場合は、編集委員会の湯本／九州大学までお願い致します。

（宛先：yumoto@design.kyushu-u.ac.jp、アドレス変更しています）

4) 問合せ

広報公聴を担当する広報委員会が、戴いた問合せを整理して各担当に連絡致します。前回にもお知らせした連絡事務所に、何なりとご連絡下さい。

電 話：03-5953-8575

（インテリア学会と教えてください）

FAX：043-286-7456（FAXのみです）

5) その他

学会内の公聴を試みたところ、もっと情報をオープンにして欲しいというご意見が多いようです。そのための手段としては、やはりメールニュースが最も有効です。多くの学会では今、「受付窓口の集約代行化」と「メールニュース」開設が行われつつあります。「メールニュース」を受け取れない方のためには、FAXによる代替手段が取られており、ニュース発生から数日間での情報共有が可能となっています。そこで来るべきニュース開設の準備のため、機会を見つけて事務局まで「メールアドレス、またはそれに代わるFAX番号」を、お知らせ下さい。宜しくお願い申し上げます。（既に、お知らせ戴いている方は不要です）

□論文審査委員会

委員長：直井英雄（東京理科大学）

ただ今論文審査の真っ最中です。例年、発行が遅れ、誠に申し訳ありません。本年こそ、年度内に発行すべく、鋭意努力しております。

また、先の話になりますが、次回の応募論文の締め切りも、10月末日を予定しております。AIDIA日本大会とも重なりますので、早めに準備して、ぜひとも多数ご応募くださいますようお願いいたします。

■支部だより

■北海道支部

支部長：渋谷邦男（札幌市立高等専門学校）

今年度の北海道支部活動の中からいくつかを紹介する。6月、北海道の一番良い季節。日本の女性建築家のパイオニアで北海道旭川のご出身の林雅子さんの展覧会（主催同実行委員会）が学会支部後援で行われた。東京大阪に次ぐ展覧会であるが、図面と写真のパネルと模型が、広々とした外光の射し込む会場、芸術の森隣りの緑豊かな札幌市立高等専門学校スカイウェイに展示され、多くの来場者を迎えることができた。

8月25日には、ロンドンRCA付属Helen Hamlyn研究所で健常者、障害者、高齢者の広範囲を対象とするデザイン研究を推進中のジュリア・カセム女史をイギリスから迎え、デザイン講演会「インクルーシブデザインによる改革」が学会支部共催で行われた。ユニバーサルデザインの考え方（アメリカの考え方）と一線を画して、人間工学、エンジニア、デザイナーの共同作業により社会改革を実行している力強い活動が紹介された。

9月6日には、見学会と交流会「モエレ沼公園ガラスのピラミッド、札幌東区ミカエル教会見学・建築家上遠野氏邸にてガーデンパーティ」がHIPA事業との共催で行われた。モエレ沼は前年度Gマーク大賞を受賞した話題の施設で、このイサムノグチの遺産は本年7月に全てが完成する。木造の小さなミカエル教会はレーモンド案に北海道の建築家上遠野氏関わったのもで、同氏の当時の話をうかがいながらの見学となった。その後は上遠野氏邸の緑豊かな庭園にてインテリア関係者の交流会。心地よい陽光と風の中で美味しい料理を味わいながらの野外パーティ。北国の夏の午後を存分に楽しんだ。

■北陸支部

北陸支部：棒田邦夫（金沢学院大学）

平成15年9月13日（土）高岡市内に建つ城郭寺院、万葉歴史館等の施設を見学しました。高岡は金沢から富山に向けて車で40分ほど走った地域で、アルミ鋳物の盛んな街です。当日は、台風の影響もあって午前中は風が強かったのですが午後にはおさまリ、専門の方のお話に耳を傾けながら、パンフレットにも載っていない造りを学ぶことができました。なお、城郭寺院は瑞龍寺、勝興寺を見たのですが、勝興寺が改修中であつたので内部の構造がよく分かり大変勉強になりました。また、平成16年5月には国立高岡短期大学の会員のお世話でインテリアシンポジウムを計画予定です。



▲城郭寺院の瑞龍寺境内にて（北陸支部・見学会）

■関東支部

支部長：小原 誠（文化女子大学）

4月25日には生産流通部会との共催で「インテリアと環境」の見学・講演会行事として、オゾンで開催中の「サステナブル展」の見学と同講演会、及び中原秀樹武蔵工大教授による「大学と環境問題」の講演会が文化女子大で開催された。

昨年来、インテリア学大系（仮称）の編集企画が、計画・構法部会のWGで進められているが、この叢書の在り方について、会員諸氏の意見を聞くべきであるということになり、取り敢えず関東支部の会員を対象として、計画・構法部会との共催で意見交換会（3月予定）を開催することとしている。これについては、本号別項の「インテリア学大系の編集企画について」を参照されたい。

かねて「インフィルの動産化」の研究を進めている東大生産技術研究所の野城智也研究室のプロジェクトによる、東日本橋にあるオフィスビルのSOHOリフォーム実験現場が2月下旬に撤収されるので、撤去前の2月24日に見学会を予定している。

最近販売された軽量・高性能なインテリアシミュレーションソフト「3DインテリアデザイナーPRO2」は、簡単に照明の多重反射効果を三次元表示できるので、来る3月9日東横学園でパソコンを操作しての講習会が開催される。

15年度は、支部幹事会でいくつかの見学企画をたてたが、土日が満員で多人数の予約できない（小笠原伯爵邸レストランの見学とランチの会）とか、土日が閉館日（日本レンガ史料館、深谷市）だとかで、学校の先生方の参加を前提にすると、実行困難ということで、これらは今後の検討課題となっている。

■関西支部

支部長：北浦かほる（大阪市立大学大学院）

昨年9月20日には難波パークスの竣工前見学会を実施いたしました。本年は、秋に開館予定の美術館の竣工前見学会を計画しております。後日詳細が決まり次第お知らせいたします。

今回は2月に催される、関西インテリアプランナー協会（KIPA）主催の講演会と見学会を、インテリア学会関西支部が後援することになりましたので、ご案内致します。

記

場 所：2003年度日本芸術院賞受賞『平等院鳳翔館』
日 時：平成16年2月22日（日）午後2時～4時
講 師：設計者 栗生 明
会 費：後援団体会員 2,000円（非会員2,500円）
申込み：KIPA事務局 FAX. 06-6266-5745へ

■中国・四国支部（平成15年度後半）

支部長：灰山彰好（広島女学院大学）

1. 支部活動の概要

本年度後半もまた、中国インテリアプランナー協会（CIPA）との協力関係（仕事のCIPA、勉強の学会の声あり）のもと、残りの日程と事業計画を順調に実施している。また、広島デザイン振興機構の一員として、支部会員、森保洋之氏を講師とするデザインセミナーをもった。

2. 平成15年度実施事業（後半）

1）第2回見学会（実施）

9月14日、「島根を見る会」大森銀山、ブラハウス、川島家。33名参加。才気縦横といった感じのファッションブランド発信現場、大田市職員が陣頭指揮を執る町並再生の現場が即、観光資源となる図式に感動。

2）第2回ミニレクチャー「イリア・丹土翠氏の仕事」（実施）

11月11日、株式会社イリア、丹土翠氏、48名参加。第一線デザイナーの魅力と迫力と。

3）広島デザイン進行機構デザインセミナー（実施）

「地域に合ったいえとまちのカタチ・再考—山口県上関町祝島集落調査を中心として—」12月3日、広島工業大学環境学部・森保洋之教授。

4）第1回講演会「暮らしの中で学ぶデザイン」（予定）

平成16年1月31日、中村好文氏

5）第3回ミニレクチャー「空間のDNAを継承する」（予定）

平成16年1月31日、遠藤吉生氏

3. その他の活動予定

残る講演会とミニレクチャー。また、一昨年まで毎年「国際デザインシンポジウム」を開催しながらも諸般の事情で休会中の広島デザイン振興機構の活動再開を目指して、諸団体と話し合いをもっている。

■研究部会だより

■歴史部会

部会長：内藤 昌（愛知産業大学）

代表幹事：河田克博（名古屋工業大学）

1. <見学会>の報告

平成15年11月7日（金）、「山形の近代建築」と題して、明治初期の県令（今の県知事）であった三島通庸が、文明開化政策の一環として積極的に建造していったことに始まる山形県の洋風建築を、近代化遺産の視点から見学した。山形市・天童市・寒河江市の学校・病院・役所など全7棟を見学したが、類例の少ない構法や技術を改めて確認するなど、充実した見学会であった。

2. <講演会>のご案内

下記の要領で講演会を開催しますので、ふるってご参加ください。

記

講演会「21世紀のデザインを考える（PART-Ⅱ）—庭園と建築—」

<主催>日本インテリア学会歴史部会

日本建築学会東海支部歴史意匠委員会

古来からのテーマ、庭園と建築とのかかわりを、その21世紀におけるあり方の展望として、伝統的庭園や近代庭園の歴史的展開をふまえて講演していただく。

講 師—尼崎博正（京都造形芸術大学副学長・教授）

主旨説明—内藤 昌（愛知産業大学学長・教授）

会 場—名古屋工業大学2号館1階F1講義室
（名古屋市昭和区御器所町）

日 時—2004年3月6日（土）13：30～16：00

定 員—150名

参 加 費—無料

申込方法—FAXまたはEメール、ハガキで、①氏名・年令、②連絡先住所・同電話番号、③所属（学生の場合学年も）を明記し、「3／6—講演会参加希望」として、2月28日（土）までに申し込む（定員過剰のとき、回答）。

申込み・問合せ—〒466-8555 名古屋市昭和区御器所町名古屋工業大学ながれ領域社会工学

河田研究室気付「3／6—講演会」事務局

TEL／FAX；052-735-5512

Eメール；kawata@nitech.ac.jp

■人間工学部会

部会長：白石光昭（小山工業高等専門学校）

今年度第1回研究会を11月29日（土）に、「空間の中の見えないルール」と題した研究会を開催した（場所：千葉工業大学）。タイトルにあるように、人間の心理的な面とインテリア空間の実寸法との関係について、各講師の方からそれぞれの立場から研究成果等を紹介していただき、その後ディスカッションを行った。

まず、東京大学西出和彦先生からは、「人間の生活を支える「空間」と題して、空間心理の知見について初期から現在までの研究成果を紹介していただいた。また、今後の人間工学や空間心理の研究はマズローの欲求モデルの第3段階に移行する時期ではないかとの意見もいただいた。

次に、平安女学院大学の橋本雅好先生からは、「臥位での空間把握特性～病室空間のあり方（再考）～」と題して、空間把握の事例として病室空間における中心姿勢である臥位時の空間把握について、立位時との違い、臥位時の特徴を紹介していただいた。また、これらの成果をもとにした病室空間のあり方について提言をいただいた。

最後に、空間を設計する立場からの研究として、小山工業高等専門学校高橋大輔先生から、「建築空間の構成を探る」と題して、空間の雰囲気研究の系譜、空間のイメージ研究の系譜を紹介していただき、それらを基礎に開発されたパズルマップ法について紹介していただいた。

その後、短い時間ではあったが、ディスカッションを行い、無事終了した。ご講演いただいた講師の方、参加していただいた30名の方に感謝いたします。

なお、今年度第2回研究会（案）として、3月25日（木）に日産追浜工場及び岡村製作所追浜工場の見学会を予定しています。現在交渉中ですが、多くの方の参加をお待ちしています。

■教育部会

—平成15年11月22日教育部会幹事会の報告—

部会長：北浦かほる

幹事6名の出席で女子美大において会議をもった。議題は「インテリア学会教育部会活動の方向」ということで、教育部会として現在何をすることが重要かについて3時間にわたって話し合った結果、以下のような方針で教育部会を運営してゆくことを確認した。

1. 教育研究会を年に1～2回実施する。

- ・担当は市村、植松の2人にお願いし、原案・企画立案をたててもらう。
- ・総会、または大会の前日などに合わせて行う。
- ・発表者を2～3人決めて課題や教育プログラムの工夫、ケーススタディなどを発表してもらう。

2. 卒業設計・制作作品展の作品集の作成

- ・担当は田辺、見城の2人にお願いする。作品展10回目を記念してまとめる。

- ・A4、26頁程度、カラー印刷とする。

3. 学校所属会員への卒業生の進路調査と、企業会員への採用人員調査を実施する。

- ・担当は川島、北浦（お願い文の作成）。学校所属会員へは卒業生の就職先の「職種」別人数の調査、
- ・企業会員へは「職種」別採用人員数の調査。平成1年・平成8年・平成15年の3年分を調査する。

次回の教育部会幹事会は平成16年1月24日 午後1：30から女子美大で行う。

■CAD部会

—インテリア製図法WGの活動—

CAD部会：奥田幸宗（東京理科大学）

CAD部会は、インテリアCAD表現手法WGとインテリア製図法WGとで構成されている。今回は、インテリア製図法WGの今年度の活動について報告する。

インテリア製図法WGの研究テーマは、「インテリア製図の標準化」である。今年度は、インテリア製図における製図法の現状を把握することに主眼を置いた。

研究の内容は、(1) 国内外の、インテリア製図に関連する規格等の調査・分析、(2) インテリア関係の教科書、書籍等における製図法の調査・分析、(3) 実際のインテリア図面における製図法の現状調査・分析である。

(3)の調査においては、まず、インテリア図面を描いているインテリア設計事務所数社を訪問し、図面を見せてもらい製図法を調査すると共に、担当者にヒアリングを行った。そして、ヒアリング調査の分析結果および上記の(1)(2)の分析結果を基に、インテリア設計等を行っている企業188社の人たちにアンケート調査を実施した。

有効回答数は63通であった。アンケートの内容は、インテリア製図に関する社内基準の有無；インテリア製図規格の必要性；使用している図面の種類と縮尺；CAD製図について；平面図・展開図における表記内容、線の太さ、線種、表示記号など、である。

インテリア製図に関する社内基準が有る企業の割合は30%、無い企業は53%である。インテリア製図の規格（例えばJISの「建築製図通則」にあたるもの）の必要性の有無については、全体の55%の人が必要、28%の人が必要ではないと回答している。なお、社内基準が無いと答えた人たちが、規格が必要であると答えている割合が高い。

今後の活動としては、現状調査を踏まえ、インテリア製図通則（案）を作成する予定である。

インテリアCAD表現手法WGおよびCAD部会全体の活動については、次の機会に報告いたします。

■事務局より

事務局：藤城幹夫

- 1) 会費納入のお願い：H15年12月末、会費未納の方は約70名です（含、異動先不明）。会費収入が唯一の本会運営資金ですから、まだ納入していない会員は急ぎ納入をお願いします。
- 2) 学会予算が厳しい折、経費を節減するため総務のご指導・ご協力を得ながら、事務局のすべての業務は1人で運営しており、ご不便や見落としなどもあるかと思ひます。ご不便をお掛けしますが、いましばらくお待ちください。
- 3) 事務局へのご連絡⇒Fax：043-286-7456（事務局専用）◎お急ぎの方Tel：043-250-3013（拙宅。Faxも同じ）
- 4) 会員の住所変更・訂正（H16／1／15）
 - ①佐々木京子：〒080-0027：帯広市西17条南4丁目33-16（新住所）
 - ②雨宮 勇：〒466-0812：名古屋市昭和区八事富士見801 ライオンズマンション八事ガーデン3-110号（訂正）
 - ③長山信一：高岡短期大学産業工芸科⇒産業デザイン学科
 - ④河原由紀子：神戸女子大学瀬戸短期大学⇒神戸女子大学家政学部
 - ⑤川村直道：ミサワホーム(株)調布⇒ミサワ東洋(株)横浜支社

⑥峯 健二：サイサンミサワホーム(株)春日部デザイン設計室⇒春日部設計課

⑦大内啓子：〒339-0073：岩槻市上野4-6-23（財）日本色彩研究所（新住所）

5) 会員の異動（第2回理事会承認）

①退会者

宇津崎光代
大沼 新一：(株)ミセスリビング
岡本真理子：東北ミサワホーム(株)
柏原 敏雄：(株)文化環境研究所
柏原 敏雄：コクヨオフィスシステム(株)
石田 忠昭：金沢学院大
田中 聡行：田中デザイン事務所
西田 幸男：大成建設(株)
藤原 宏行：ミサワホーム(株)
穂高 泰樹：信州ミサワホーム(株)
峯崎 秀康：ミサワホーム九州(株)

②入会者

藤原 智代：東北芸工大（院）
山口 光：東北芸工大（院）
伊藤 将：九州芸工大（院）
迫坪 知広：九州芸工大（院）
播磨 昌子：九州芸工大（院）
陣内 雄次：宇都宮大教育学部
對比地 勝：武蔵野美大・聖徳大（短大部）
三輪 真裕：名古屋工大（院）

■編集後記

本年度2回目の発行になる30号です。大会特集ということで編集いたしました、発行が遅くなりましたことお詫び申し上げます。なお、今回、掲載が間に合わなかった座長報告については、次回の年報にて紹介させていただく予定です。年末年始のご多忙中、短期間での執筆依頼にもかかわらず快くご寄稿いただいた皆様に紙面をお借りして御礼申し上げます。会報に関するご意見、ご寄稿などございましたら、編集委員会（本誌委員会報告にある連絡先）の方にお寄せいただければ幸いです。（渡辺秀俊）

■事務局

日本インテリア学会事務局（千葉分室）
事務局長 藤城 幹夫
〒262-0045 千葉市花見川区作新台2-23-11
FAX：043-286-7456

■日本インテリア学会会報第30号（2004.2.1発行）

編集者：湯本長伯、渡辺秀俊
発行者：高橋鷹志（日本インテリア学会会長）
広報委員会：湯本長伯、小林輝暹、藤城幹夫、白石光昭、渡辺秀俊